

溝隠し（ミゾカクシ）・畦筵（アゼムシロ）

須藤 健一

キキョウ科ミゾカクシ属の小型の多年草。北海道から沖縄までの水田，湿地，畦などの湿り気のある所に普通に生育する。水田周辺の溝が隠れてしまうほどに生育することから「ミゾカクシ」といい，あるいは畦に筵を敷いたかのような群落を形成することから「アゼムシロ」ともいう。茎は細く，ランナー状に四方へと地を這う。地に着いた各節から根を下ろす。茎からは分枝が斜上する。背丈は10～20cmほど。この茎からの再生力は強く，短く切断されても再生してくる。葉は2列に互生しやや厚くて柔らかく，長さ2cmほど，幅3mm前後の長楕円形で，縁には鈍鋸歯がある。

6～10月頃，葉腋から長い花柄を伸ばし，径1cmほどの花を1個つける。合弁花の唇形花で先端が深く割れ，上唇が大きく左右に2裂し，下唇は3裂して反り返る。花弁は丸い花の片方を取り去ったように片側に広がる。中国では，片方だけ紫色の花を付けるので，片方の顔の意味で「<sup>はんべんれん</sup>半辺蓮」と呼ばれ，解毒などの薬用として用いられるが，全草にアルカロイドを含み誤食すると中毒を起こす。

左右に開いた上唇花弁の間は深くえぐれ，特徴的な蕊を持つ花の内部がよく見える。基部から伸びている筒状のものは雌蕊の花柱を5つの合着した雄蕊が包んだものである。雄性先熟で，初めは雄性期で花粉を出し，花粉をすべて出し終わると奥から雌蕊が顔を出し，残った花粉を未熟な雌蕊が押し出して雄性期が終わる。その後先端から雌蕊の柱頭が飛び出して雌性期になることで，自家受粉することを防いでいる。

雄性期の花柱を包んだ雄蕊の葯筒の先端にはかわいらしい毛が覗いていて，この毛が花粉媒介者の昆虫などによって押されると花粉が出てくる仕組みになっている。また，花弁は淡い紅紫色であるが基部には緑色の紋様があり，そこへ向けて裂片の中央に濃い紫色の蜜標が縦に走っている。それらが昆虫飛来の

ためのマーカーとなっていると考えられているが，そうすることで昆虫が着陸した花弁の裂片の真上に葯と雌蕊の柱頭が位置することになる。

花が終わると花柄は下垂し丸い根棒状の蒴果を付ける。蒴果は5～7mm程度，中に0.5mmほどの種子が数多く入っている。

このミゾカクシの花は小さな花ではあるが，左右に伸びた上唇と3つに分かれて反り返った下唇とが，空を飛ぶ鳥のように見える。小柄な鳥や紅紫色の鳥もいるだろうけれど，左右に広げた羽，3枚に分かれた尾羽などは，もう50年以上前になるが手塚治虫の漫画「火の鳥」を思い起こさせる。ミゾカクシの雄性期の葯筒は，火の鳥の首から頭にかけての部分に相当するのだが，頭の部分に当たる先端がやや色黒く，首のところから下は少し色が薄れ赤みを帯びてくる。雄性期の葯筒の先から覗いている毛は火の鳥のくちばしである。この花の姿は，まさに火の鳥が飛んでいく途中に首を伸ばして後ろを振り返り，別れを告げているように見えたりするのである。願わくは，この葯筒の色が白いか赤いかであればと思ったりするのである。

